

学校から帰ってくると、カバンを机に置き、ベッドにダイブする。
ふかふかのベッドに寝転がってゴロゴロする……俺の至福の時間だ。

そして、ゴロゴロしていると、健康な中学生男子としては意味もなくムラムラしてくる。

ズボンに手をかけ、ティッシュに手を伸ばそうとした、その時。

「どーん！」

「いえーい！」

「お邪魔しまーす」

「うわっ」

姉と、その友達の女の子二人が、いきなり部屋へと飛び込んできた。

「あれえ」

「なんだ、してないじゃん」

「たっくん、ごめんね」

「ななな、何だよ！

「いや、いきなり開けたらオナニーしてる所が見れるかなーって」

「ふざけんな！」

姉が、残念そうに話すのを遮るように、俺は怒鳴った。

……危なかった

「どうすんの？」

・姉の友達その一、中村恵梨香

茶髪のワンレンボブ、ギャルっぽいというか、見た目はもろにギャル。

制服の胸元が大きく開きエロい、健全な男子中学生にとっては目の毒だ。

オカズにさせていただきます……

「お部屋に戻ろうよ、たっくんに悪いし」

・姉の友達その二、日高春陽

肩までのサラサラ黒髪ヘアー、目が細くとても優しそうに見える、っていかととても優しい……正直好きだ。

正しく、ちゃんと着込んだ制服の胸が非常にたわわに実っている。

ごちそうさます……

「よし！エロ本探そう！」

この馬鹿が俺の姉、一ノ瀬光莉

ショートカットに大きな瞳、活発で、元気を取り柄の体育会系女子。

動いた時にチラッと見える腹筋はうっすら割れている。

こいつはオカズにならない、姉だしね。

「や、やめろー！」

俺の抵抗も虚しく、ベッドの下や本棚に巧妙に隠した俺のオカズ達が次々と見つかってゆく。

「うわー、こんなの見てんだ」

「なるほどね、たっくんの性癖把握 w」

「…….すごいね」

顔から火が出そうだ。

「この DVD のパッケージの女、ハルに似てね？」

春陽さんは皆んなにハルの愛称で呼ばれている。

「本当だ、巨乳で黒髪……似てるかも」

「もう、そんな事ないよー」

「ハルのほーがでかいもんな w」

「もう、エリってば」

ギャルの恵梨香さんの愛称はエリ、エリさんが DVD のデッキを操作し始める。

「ちょっとエリさん、やめてー！」

「いいじゃん w 皆んなで見ようぜ！」

俺の意見など通るはずもなくエロ DVD の鑑賞会が始まる。

最初はきゃーきゃー言っていた女子達は、内容が進むにつれ無言になり、すっかり見入っている。

「ねえ、デカくない？無理でしょ……」

「い、いやーこんなの普通だろ……うん普通普通」

姉の独り言に、さも経験ありそうに答えるエリさんは、目が泳いでいる。

これは絶対に実物を見た事ないな。

やがて女優の顔に向かって射精されるシーンで女子達から悲鳴が上がる。

「うわー、きったない」

「いや、普通普通、顔にかけるくらい普通だよ」

そういうエリさんの顔も嫌悪感に歪んでいる。

「あんなにいっぱい出るんだ……」

「でもモザイクが邪魔で、アレが全然見えないね」

「そこに実物あるじゃん？」

三人は一斉に俺をみた後、お互いに顔を見合わせ、ニヤリと笑う。
後ずさる俺に、飛びかかってくる3人。

「「ちんちん見せろ♡」」

「や、やめろ……やめてー！」

三人がかりでズボンとパンツを脱がされ、下半身が剥き出しなる。

「あれ？さっき見たのと比べると大分……」

「小さいな……」

「小さいって言うな！

半泣きの俺にハルさんが笑顔で

「大丈夫、たっくんのは可愛いよ♡」

……全然フォローになってない。

「こんなイモムシみたいな感じで良いの？うちの弟のちんちんて変？」

「いやー……あ！皮かぶってるからだ！これを剥けば！こんな感

じで……」

エリさんが、ペニスの根本を掴み、反対の手で下へと皮を引っ張る。

むきっ

エリさんに剥かれてしまった……